

近頃、読んだ本のことです。

まず、ショーロホフの「静かなドン」。何十年も前から、本棚に積ん読になっていたのを、片付けました。新潮社版で、文庫本より大部で、3巻あります。読むのに3か月掛かりました。舞台は今、テレビを賑わせているウクライナとロシアの国境近くのドン河流域のコサックの物語。勇敢で知られるコサックですが、愛郷心が強く、助け合って暮らしています。そこへモスクワからボルシェビキ（共産主義）の思想が来て、コサックは割れ、革命派、反革命派に分かれて戦います。

主役のメレホフ家には、祖父、祖母、その息子二人、娘一人、息子の嫁二人の構成ですが、長男は戦死、次男は反革命派で活躍し、将校に出世。次男は隣家の主人が戦場に出ている間に、その嫁とよい仲になる。次男の出征中に妻は実家に逃げ帰るが、実家から追い出され、祖父が黙って引き取る。

戦争の場面が、これでもかと延々と続きますが、これを辛抱して読めば、メレホフ家の家族の一人一人の行く末が感動的に描かれます。

久し振りに世界文学を味わいました。

次は、Guillaume Musso の「La Fille de Brooklyn」、フランス語です。

文は「Le Roman de Renart」よりも易しく感じました。500 ページ余あり、読むのに8か月かかりました。

内容は、主人公ラファイエルの恋人が失踪し、その行方を探すミステリーです。

恋人はフランス国内で失踪したのですが、どこにいるのか、何故、失踪したのか調べるのに出身地ニューヨークのブルックリンに行って、過去を調べる必要がある。ニューヨークで恋人の家族に当たる内に、その母の10年前の事件が浮び上がる。恋人は、実は、アメリカ大統領の隠し子であることが原因の事件。

ラファイエルに協力して調べてくれていた友人で、元刑事もニューヨークへ来て、事件の証拠探しに協力し、決定打を探し当てる。しかし、その元刑事の娘もフランス国内で、誘拐され、殺され、同時に誘拐されたラファイエルの恋人は逃げ出し、その時、警察に通報すれば、自分の娘も助かったであろうと、その恋人を、実は怨みに思っている。

なかなか面白かったです。現代を背景にしているので、ケータイやメール関連の単語が辞書にないのに困りました。